



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一一四号(二日発行)
平成十一年三月一日

年表で読む 古平の歴史

《22》

■教育所ができる

『学制』が実施されることになったといっても、受益者負担ということは、教育を受ける側でその費用を負担しなければなりませんでしたが、当時の住民の生活状況からみてせっかくの新しい学校教育もなかなか進みませんでした。

古平郡では明治七年に、開拓使の官舎を仮教育所として、生徒十七人に読・書・筆算を教えたとあります。そして翌八年(一八七五)一月、郡内から費用を集め、真宗のお寺を教育所にして教育が行われました。

現在の古平小学校はこの年を開校記念日にして、昭和五十年(一九七五)八月、開校百周年

■新校舎の建設

記念式を行いました。
教育の内容も次第に整ってき、明治十年九月、それまでの教育所を浜中学校と改称しましたが、翌十一年には生徒数も百人を超えるようになり、有志に因って学校を新築することになりました。

古平は鯉漁が盛んであったことから、漁場主や大きな商店主などからの寄付だけで五千円ほどにもなり、明治十二年十月に着工し、ちょうど一年後の翌十三年十月に完成しました。

校舎は建坪百四十七坪余り、洋風の一部二階建てで、外壁には白ペンキを塗り、周辺地域の評判になるほどのモダンな校舎

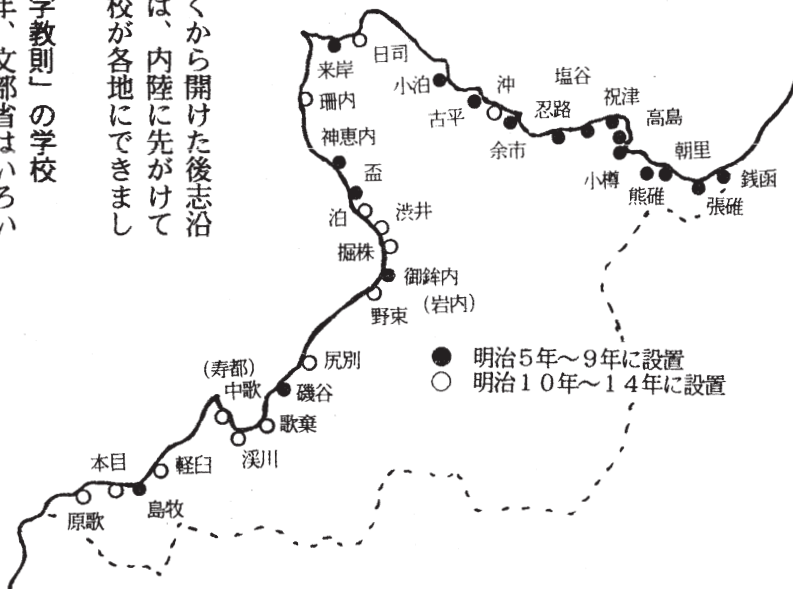
でした。

■後志沿岸部の学校

学制が実施されたといっても、新しい学校教育はなかなか進みませんでした。それでも教育所の設置は急に増え、各地に公立の学校が建設されるようになりました。

ろな事情から正規の教科を指導できない小学校を三年制とし、日常生活に題材をとった簡易なものにしました。多くの小学校はこれにふくまれ、浜中学校も、始めは「変則小学教則」による三年制の小学校でした。

開拓使時代の各地の教育所・学校



漁業で早くから開けた後志沿岸の地域では、内陸に先がけて教育所や学校が各地にできました。

■「変則小学教則」の学校

明治十三年、文部省はいろいろ

大正五年

2/21 本陣の浜の潮が引いて大勢の人が出て海藻をとっている、春らしくなった、共同漁場では雇いが集まって雪引きをしている

2/23 青森からの漁夫を乗せた船が二艘入港している、余市・古平間の定期は古英丸・富丸・砂川丸・堀越丸・日本丸の五艘である

2/29 西村歩方、昨日から廊下で火をたいて仕事、船頭株の四人が梓網をつくっている、今日、港町大地と一さんでカレ網に鯨が十余匹掛かったというので大評判だ

3/1 役場で農事講演会があり聞きに行く、モニリヤ病その他病虫害と肥料についてであった

3/2 昨日に続いて役場で農事講演会、果樹の剪定、イモ、ブドウについての講義

3/4 菅大尉の軍事講演会が小学校であった、実戦の体験を語りなかなか面白かった三百人以上の人が集まった

3/9 鬼鹿沖で秋田からの漁夫四百人ぐらいが乗った威興丸(西〇〇ト)が座礁、救助船も高波で近づけず、大湊から駆逐艦二隻が救助に向かったとのこと

3/12 建網の型入れをしている、種田、父では釜たき場を造っている

3/13 網卸しの祝いの餅をつく音が聞こえてくる、

高野名幸作さんの日記から



[15]

小樽行きの古英丸・富丸・美国丸・北辰丸・砂川丸がひんばんに往来している

3/16 ガンズが大漁、ガンズ網がこの日で四百間売れた

3/19 マスが釣れるというので、テグス、釣針が売れる今日もガンズ網の客が来る

3/21 沖村山中から丸山岬一帯にかけて投網している

3/22 ①山口漁場では鯨三モッコとったという、方々で何尾かとれたようだ、二尾貰

い初鯨を神棚に供える

3/27 昨夜、鯨漁がある、⑦七、八杯、西村四、五杯、沢江方面十杯ほど、全部で二千石ほどの漁があった、粒買

い汽船が三隻入港している、二十軒余りから鯨を貰う

3/31 昨夜は群来村方面で鯨漁あり、困で一梓、崎長歩方一梓、沖村、沢江方面は一向にない

4/5 吹雪模様の時化で、刺網の流失したのが沢山ある

ようだ、客が来たが網は品切れである

4/8 前浜は鯨大漁、全歩方、⑩、西村、本陣歩方十二杯、十三杯、田岸、雷歩方四杯、歩方連が大漁でずいぶん賑やかになった

4/9 歌棄山中大漁、△三十杯、崎長二十杯、神田ほか五杯から十二杯、夜になっても漁があるというので浜は大

さわぎである

4/10 昨夜は前浜・沖村が薄漁、刺網が大漁で二十本ぐらい、今までで一萬石、本陣はよくないようだ、歩方はもう経費分をとってしまった、刺網は昨年ぐらいの漁があった、あとひと漁あれば申し分ない大漁だ

4/12 歌棄山中より前浜まで大当たり、△四十杯、崎長二十杯、神田三十杯、(正、共同二十杯、刺網は昨夜の強風で見合わせた、網を刺した人はずいぶん掛かった、浜中方面は実に景気がよい、この日千五百石ぐらい、合計で一萬三千石ぐらいはあるだろうとのこと、

4/13 歌棄山中から前浜までがまた大漁、△五十杯、崎長、神田三十杯、共同十杯、西村四杯、刺網は前浜から一帯に掛かる、本日は四千石、古宇・岩内方面は思わしくな

い、七時ころからまた、前浜の本陣・港町方面で模様があるというので大さわぎだ

—— 次号へ続く ——

古いノートから ③

稲倉石の思い出づい

富山市

高橋 藤藏

(元・稲倉石鉱業所勤務)



花 火

— (昭四十一・八記) —

「涼しい夏の北海道」と謳われていても、やはり夏の暑さが身にこたえる日もある。

転動した当時は、さして暑さを感じなかったのに、何時しか北海道の風土に順応してしまっただろう。

肌がベトつき、むっとする夜は、夜空にまたたく北斗七星を眺めながら暑さから逃れた。

何時とはなしに集まった子供達の輪の中で、線香花火に興ずるのも、捨て難い楽しみのひとつである。

小さい火玉がくるくると回りながら、パツ、パツと飛び散る

閃光と歓声。

そこに、子供らと共に花火をかざす壮年の私もいた。

ふしつにも春が

— (昭四十二・四記) —

冬の寒さが厳しければ厳しいほど、雪国の春は待ち遠しい。雪が解けはじめ、じっと眠っ

ていた黒い大地が顔を出し、木の芽が蒼くほころび、渡り鳥が飛び交う四月ともなれば、丈余の雪に埋もれた稲倉石にも、ようやく春の息吹が訪れる。

雪解けのぬかるみを、泥だらけで走り回る子供たちと戯れながら、今年も、春は音もなくやって来た。

雪と北海道

— (昭四十二・十一記) —

まだ十一月のはじめというのに、十日ほど前から降り出した雪が、一向に解けそうにない。

例年ならば、山奥の稲倉石とはいえ、根雪になるには、まだまだ早い時期なのに、今年は雪の訪れがものすごく早い。

好天が長く続いたから、その分だけ寒さも厳しくなったのかも知れない。

チラチラと降り出した雪を眺め、二・三日もすれば解けるだろうと思っていたのに、すでに三十センチも積り、鉾山長屋では、どこの家庭もドロナワ式に雪囲いをしたり、窓にビニールを張り付けたりしている。

いよいよ威勢のいい風と、大勢の雪を従えた冬將軍との生活がはじまる。

白い息をはずませ、滑っては転び、立ち上がってはまた転ぶ子供たち。

白樺の中を音をたてて突っ走る吹雪の音。

やはり、北海道と雪は、切っ

ても切れない自然の営みがあるようだ。

ようやく春が

— (昭四十三・三記) —

まだまだ寒い三月。でも、春が少しづつやって来たようだ。

毎年の事ながら雪との生活が長く厳しいだけに、北海道の春の訪れは、私たちの心をなごやかに和らげてくれる。

まだ消えやらぬ雪を掻き分けながら、若草がようやく芽を出し、かすかに温んだ小さな流れでは、春を待ちかねていた水芭蕉がふっくらと芽を出した。

すべてが、太陽に向かって大きく手をかざしているようだ。

波静かな磯辺では、真っ赤にかじかんだ手で小魚を追っている子供たちに、三月の太陽が温かい春の光りを差しのべ、海の彼方には、積丹の荒波にジッと耐えてきたローソク岩が、背伸びをするかのように突っ立っていた。

待ちわびた春は、足音をしのばせ、すぐそこまで来ていた。

雪の日に想うこと

渡辺 ハツエ

例年になく一か月も早い冬の訪れには戸惑ったが、雪国に住む者の定めと割り切って、元気に除雪に精を出しました。

二月に入ったら降雪も和らぐかと、隣人同士、老い達は励まし合って頑張って来ました。

「冬来たりなば春遠からじ」もむなしく、立春が過ぎても春のさざしはまだ遠いようです。

かえりみると、私の記憶では平成六年の冬も大雪に見舞われて、豪雪といっても過言ではなかったと思います。しばれに雪はつきものです。三年続きの暖冬であっただけに、今年の寒さは身にしみました。

以前のことでありますが、私はある吹雪の朝に、当時、病氣療養中であつた亡夫の薬を受け取りに、バスで浜町の病院へ行きまして、前もって電話しておいたので薬は出来ていました。

事務員さんにお礼を言い、病

院を出てバス停へ行つて時刻表を見ると、次は十時十五分発があります。時計をみると十時でしたので、私はスーパーへ行つて買い物したいが間に合うだろうか、雪道はバスも遅れるだろうと、勝手に憶測してスーパー

へ向かいました。

店内はすいていて、気ぜわしく数点の買い物をしてスーパーを出たら、バス停にバスが止まっていたのです。「間に合わないかな……」と思ひながらも、往來する車と自分の足元に気を配りながら、急ぎ足でバス停に向かったのです。

スーパーからバス停まではわずかな時間ですが、私にとって何十分にも感じられました。

故郷を偲んだ佐渡人会

(下)

竹内 コト

佐渡から移住して来た人たちの出身地もさまざまでした。

稲鯨、相川、真野、赤泊、五十里、新稲、二宮、私のところは二見町という具合で、それぞれ三々五々集まって、尽きない話で楽しい時を過ごしました。

私も、その当時は健康でしたから、一生懸命に世話係を努めました。特に今でも思い出にあるのは、忍路観光ホテルへ行つ

たときのことでした。

ホテルの玄関に着くと、なんと、賑やかなソーラン節の流れる歓迎ぶりで、夕食のお膳も昔風で、鯉場のころの祝いの席を思い出しました。また、鯉場の道具なども飾ってあつて、懐かしい気分になりました。

古平からも近く、海岸の側にあつて、私が以前勤めていたころ、職場の慰安旅行で来たこと

買い物袋を下げて、急ぎ足で来る私を運転手さんは見ていたのでしょうか。私が乗ると、バスはすぐに発車しました。「どうもありがとうございました。」

私は胸中、運転手さんに感謝しました。そのバスに乗れなかったら、また一時間は待たなければならなかったのです。

があつたので、今度の佐渡人会の旅行にも紹介しました。皆さんも大変喜んでくれて、大いに親睦に役立ったのではないかとうれしく思っています。

会の役員会は、必ず中央旅館でやっています。最後の会長さんは、亡くなられた本間市太郎さんでした。副会長は浜町方面が相良雄治さん、新地方面が笠井義隆さん、幹事は金子建設さんと、高野左官屋さん、岩崎倉治さん、それと私でした。会計は宮森栄蔵さんでした。そのほか役員として、古平丸の斉藤さん、外内さん、大地由蔵さんがおりました。

⇒(次ページへ続く)

ふるさと 歳時記

人の世の峠はるかに こき妻に捧げる

(1)

土口 川 義雄

山里の梢に群れるヒワ仰ぐ

十一月五日、仏間で長い唱題を続けていた妻が、出て来るなり「今日は、きくさんの祥月命日なんですよ。」と、厳しい口調で私に告げた。

現在に安住して、先妻の命日も忘れていた私は、跳ね起きるようにして仏間に端座した。

昭和二十一年夏、生きて戦場から帰って来た私は、二十三歳になっていた。私が楽天家であるように、父も母も、同類に相違なからうから、「ああ、あいつは簡単に死ぬ奴じゃない。必ず帰って来るさ。」と、他人に広言していたそうだから驚きである。それどころか、前年の終戦直後から、私の嫁探しを始めたらしい。

古平の父母の許を離れて、十余年が経っていた。他の弟たち

のように、親父にシゴかれながらでも漁師をやるうとする柄でもないから、親元を離れて暮らす分にこちらは何の不自然さも感じていなかったが、親父とすれば、嫁を持たせて、長男と一緒に暮らせる好機ととらえていたらしい。

親父が敷いた路線に乗って、私と母が、峠の駅銀山で降り、余市郡大江村の山里深く、お見合いの相手が住む、尾根内という村落までの道のりは、しぶしぶ行くせいもあるが長かった。

戦中、戦後にかけて、大勢の家族を養うために、魚の干物を背負い、帰りは米を担って、この道をたどった親父の苦労を、改めて思ったりもした。

そんなころ、私の意志とは全く関係なく、「間もなくウチの兄が帰って来る。いい嫁さんいねばか。」「いるともサ、村一

番の働き者で、みんな欲しがっているいい娘がいるよ。」

買い出しに通っている内にその村議と、すっかり仲良くなり、結果的に、私の妻は私の復員前に、二人の謀議で九分通り決まっていたと言ってもよい。

草笛の音色さやかに秋深む

親父のご機嫌の時は、ホウキ草を口に、「夕空晴れて……」とか、「菜の花畑に……」とかの曲を、よく草笛で吹いてくれたものだ。頑固親父の別の一面をみせられて、弟たちはあきれたように口を開けて聞きほれていた。

妻が、古平にやって来るという日は、初冬の、時折の陽ざしの中で降るしぐれが、今にも雪に変わるかという季節であった。親父の草笛が、そんな日にうれしそうに鳴り響き、息子の嫁どりを、心から喜んでいるふうだった。

ローソク岩のはるか沖合いを迂回して、荒れて白い牙をむく陸岩の高い波を避けながら、余

(前ページより続く)

会を解散してから十年、すでに亡くなられた方も多く、それらの方々のご冥福をお祈りして筆をおくことにします。

市まで迎えに出た伯父の漁船が、疲れ果てたような船足で、ようやく古平の港に妻を運んで来た。

「兄ッ、ねえさんは強いッ、みんな船酔いしたつてのに、ねえさんだけは、どうして、どうして大したもんだでや……」細野家の一番若い叔父が、感に耐えぬといった大声で、船を跳び下りるなりわめきまくった。

山里から海の町へ、一隻の舟見えない荒海を渡り、これからの運命(き運命)を私に託してやって来た妻を思い、私は始めて、愛ほしいと思った。

船から下りて来た妻の身体を、「ヤレエ、可愛いやのう、可愛いゆのう……」と、伯母は、自分の角巻で小柄な彼女を頭からすっぽり包んで、抱きかかえるようにして連れ去った。

(つづく)

北海道に新天地を求めて

生涯をかけた鯨漁

[上]

田 岸 倉 治

田岸倉治さんは折にふれて、鯨漁についての記録をいろいろとまとめておられました。その中から、田岸家と古平の鯨漁のこと、そして、ついに鯨が古平から消えてしまった昭和三十年までの思い出を交えて、二回にわたってご紹介をします。

昭和二十八年十二月十日、鯨漁業に一生をかけた祖父の田岸藤吉が、古平沿岸からの鯨の消滅と共に八十二歳でこの世を去りました。

生前、田岸家の略歴など書き残してくれましたが、それに付け加えて、鯨漁が盛んであった当時のことを記憶をたどりながら書いてみたいと思います。

わが家の先祖・田岸仁衛門は、現在の石川県鹿島郡中島町子田岸に生まれまし。ここは登半島国定公園の中の七尾北湾に面していて、むかしは出岸村でしたが、その後、中島町に合併になりました。天明三年（一六三）、仁衛門は家族と別れて蝦夷地・江差近辺へ渡り、やがて鯨場を経営するようになりました。これが、田岸家で鯨場を経営するようにな

った始まりです。十年ほど前に、私は石川県に先祖の地を訪ねました。お寺を含めて十八軒の家がありました。が、どれも歴史を感じさせるような旧家ばかりで、一軒一軒たずねて歩きました。聞いたところでは、確かに田岸家はあつて、今は千葉県の方に移ったようだというものでした。私は、村の方々の写真を撮って来ましたが、これは、わが家の貴重な記録として子孫に残したいと思っています。先の、田岸仁衛門が鯨場を経営したのは現在の久遠郡大成町字長磯でした。



当時、江差で知り合った寺田佐之助の長男・磯吉が、小樽の高嶋で鯨漁場を経営していましたが、縁あってその長女タキを

長男宇三郎の妻に迎えました。

そして、鯨の盛漁が続く古平郡沖村に居を構えることになり、千石場所といわれたローソク岩付近に漁業権第九号を得ることができました。

その後、貞治の時代になり、チャラツナイ・セタカムイ・沖村湾内・沖村えびす岩・入舟町の前浜の六か統の建場を持ち、小樽市花園公園通りに別荘を持つようになったのです。

その間、宇三郎は四十六歳の若さで逝きましたが、妻タキが、長女ツタ（十四歳）に、旧姓・中川藤吉（十八歳）を婿養子とし、幼い貞治の後見役となりました。明治三十九年に分家するまでの二十年間、藤吉は本家の家運を大いに盛り立てたといえます。

当時、鯨場の親方の多くは利尻の漁場に魅力を持っていて、藤吉も母タキの意向を受けて、利尻・仙法志の八木漁場に二年契約で六千円の仕込みをし、返済できない時は漁業権を譲渡するというものでした。

遙かなる故郷の思い出

[53]

わが闘病生活 ②

橘 義 春

いまから五年くらい前になるが、市役所から「成人病検査を受けるように」という用紙が私たち夫婦に送られて来た。

成人病検査は夫婦で毎年受けているが、病院によつては、尿検査と問診だけの簡単な手抜き検査で終わるところもあった。今回は、JR小金井駅近くの評判の良い診療所へ行ってみた。なるほど評判通りで、一般患者と成人病検査を受ける人が大勢来ていた。

尿検査・胸部のレントゲン撮影・心電図検査・眼底検査などがあり、血液検査は甘いシロップを飲んでから採血し、それから一時間おきに三回の採血検査をし、最後は血圧測定と、体重・身長測定があつて、たつぷり四時間もかかった。

先生もナースも親切で、評判

通りの、手抜きなしの診療所だった。

一週間後に、検査の結果を聞きに行つたところ、先生から全く意外なことを聞かされた。

「あなたの血糖値は、限界をはるかに越えていますよ。正常の血糖値は110^{mg}/139^{mg}までで、あなたは現在145^{mg}です。血糖値が200^{mg}になつたら糖尿病です。このままでいつたら、近い将来糖尿病になる可能性があります。糖尿病は沈黙の病魔といわれて、痛くもかゆくもないが、体内に深く静かに潜入する病気で、隠れた殺し屋ともいわれ、重症になつてからでは手遅れです。私は、あなたのような方を『糖尿病症候群』と呼んでおります。日本は成人の四人に一人が糖尿病になつていて、全国に千三百万人の患者

がいるともいわれております。糖尿病はインシュリンというホルモンが不足するために起こる病気です。いまのところ、この病気を確実に治す薬はありません。日常の食事を自分で管理する方法しかありません。三週間に一回、血糖値の検査を受けることと、診療所の栄養士の先生の指導で、毎日の食事の管理をしてください。」

と、言われた。

なかなか懇切丁寧な先生であつた。

早速、栄養士の先生の食事管理の指導を受けたが、毎晩飲む晩酌の二合は、今日から止めなさいと言われた。先生は、簡単に酒ツコを止めろと言うが、飲ンベエにとつてはなまやさしいものではない。赤ん坊から、無理やりガラガラを取り上げるようなものでネエベガ。ご飯はテコン盛り一杯半を、平らに盛つて一杯にする。魚は何グラム、肉は何グラム、ジャガイモは何グラム。私は、家内が作る肉ジヤガが大好物で、どんぶり一杯ぐらいペロリとたいらげてしま

うと言つたら、栄養士の先生は目を丸くしてあきれかえり、「とんでもない!」と、言われてしまった。

そのころの私の体重は七十六キロあり、腹はほてい様か、たぬきのようにでつぶりし、それこそポンポコボンであつた。自分でも太り過ぎだと思つていたので、その日からは改心して、酒は一合五勺に節酒し、ご飯は一杯の盛り切りにした。おかずは塩分を少なめにし、生野菜を多く摂るようにした。

二週間後、先生の指定した日に診療所へ血糖値の検査に行つたが、体重は相変わらず同じ、そして、血糖値が少し上がつていたのにはがっかりした。

それから二週間ごとに血糖値の検査を受けたが、体重は相変わらず同じ、血糖値の方も下がるところか、187^{mg}まで上がつてしまった。『糖尿病』と診断される200^{mg}まであと13^{mg}の余裕しかない! これでは糖尿病症候群どころか、このままだと本物の『糖尿病』だ。

——つづく——

吉平町岬短歌会詠草

長崎 フユ

頂きし緑色濃き果物の皮を雪だるまに貼りてたのしむ

竹内 コト

また来ると貰ひし荷まとめ子供らは車に積みて帰り支度す

鈴木 時子

うすれ来し眼瞬き印字濃度をさらに強めてワープロを打つ

榊 佳代

今朝もまた降り居し雪をこぎ分けて新聞を入れしは少年の父か

東 美知

冬日差しのび来し部屋にころがれる節分の豆いくつか拾う

池田 テル

ひとり居となりたる君のくろ犬初めて訪うに尾を振りて寄る

田中 香苗

キュッキュッ凍てたる道を今朝も又緊張しつつ通院急ぐ

堀 典子

誘はれて気軽にゆける楽しさに廻りくる寿司をカウスターに食む

奥山 きよみ

自が家のめぐりの雪の始末さへ目がまはるといふ若者きみは

山口 スエ

雪の上で貰ひしすけそ裁き居るに群啼く鴉にゴメのこゑ混じる

丹後 初江

雪のなか前行く媼の手さげより桃と菜の花見ゆ少し寒そげ

渡辺 ハツエ

便りない孫もそれぞれ多忙です
腰曲りその分流し台高くなり
この冬に一年とも言えぬ歳を知る
寒い朝人の情で温もれり



年金のお陰終着駅が遠くなる

石井 愛子

田舎弁みんな昔のクラス会
孫と居て童心となる祖母の皺
子と孫を案じて老いの明け暮れる